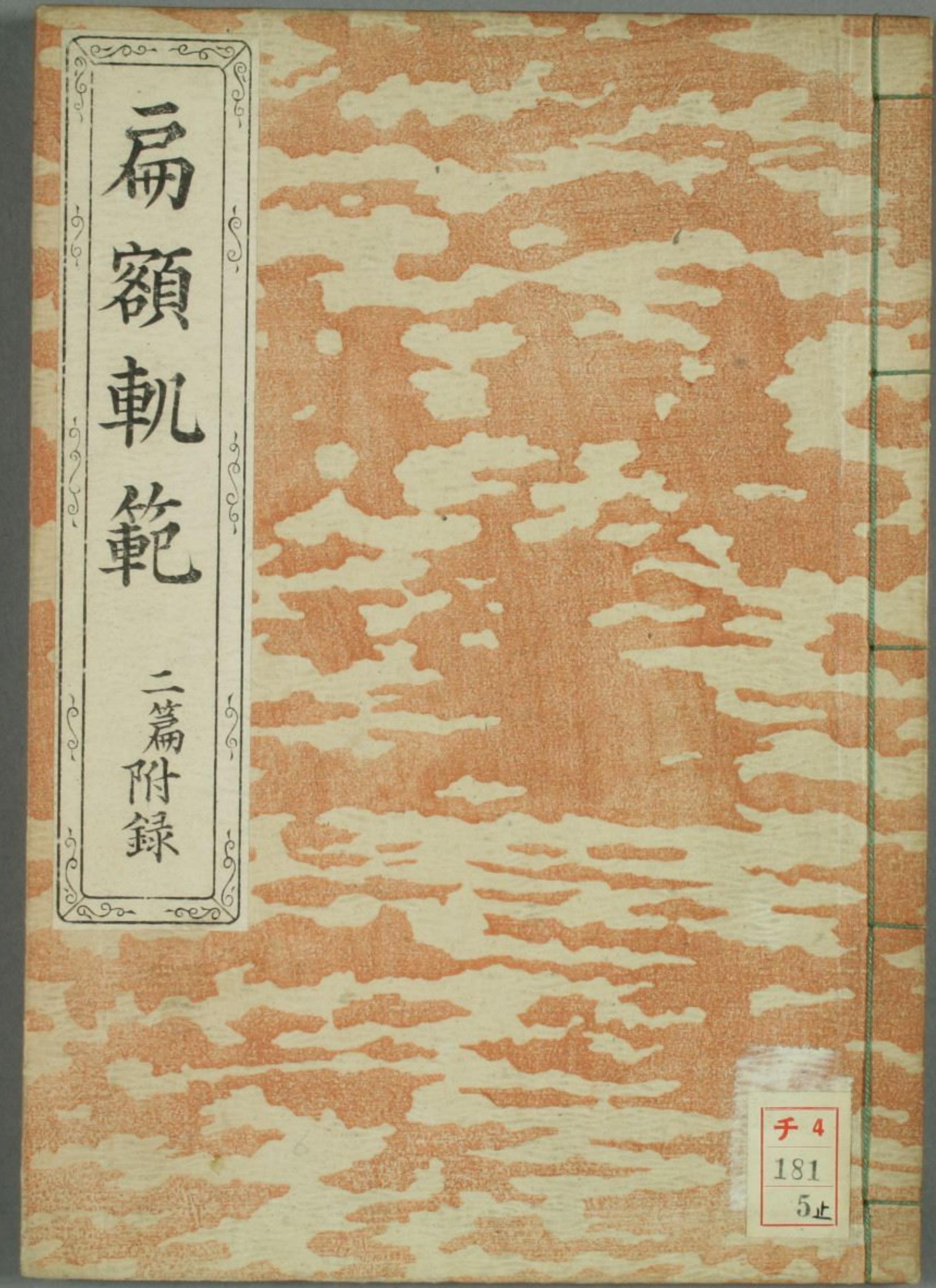
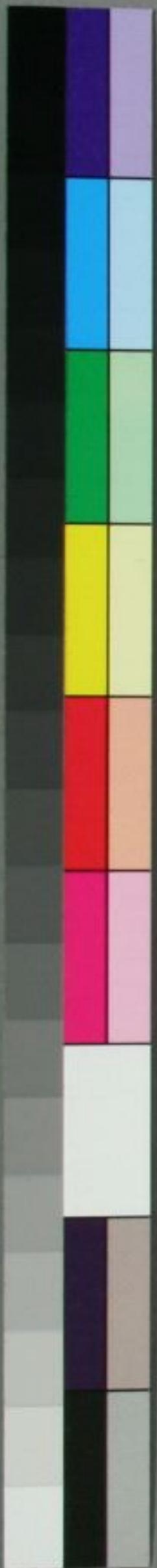




A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



85  
80  
75  
70  
65  
60

扁額軌範五之卷

先自扁額軌範初編。故行。至。之。也。画傳法闡。今。既。成。補。之。矣。  
附。源。之。氏。者。考。之。初。編。之。深。之。含。有。持。之。之。

○遊女之圖

清  
水

山東傳六画

元綠十年

詩周南云。漢有游女。不可求。倭名およ漢縁おとひをも。遊女い遊引  
そり女見そり。一云直遊引とも。游女と云。夜をひく淫寄成癡とも。と  
移久と云。艳女もあきひとも。人の淫興に連なるものと云。今  
通じて淫奔と賣春の淫と女。つまなれと云。或は遊女。川竹の淫との女と云。浪  
に漂ふぐく一生の事あわせば解合て云ア

○一弦よ辛家ハ珍ふちびく。漫えづく。まくの良女。愛の多ふすと。共  
門の玉か月。搞磨の室の津。よどく。旅人小舟と往也。桂とくらべ。ばの園  
神情。江口と島の津と浦と。小舟にまく。瀛とくらべ。湯との女とくらべ。

流と云ふより。川と繩と云ふを合へ川竹と云ふ。御女の事に  
傾城を云ふ漢書に武帝の時李延年。音律とはてよく歌ふ。或時帝のあ  
ゆく舞り。すこしに北方に住人ある。後坐して視る。一顧見る人の城と傾け  
ふるび顧れば人の國を傾くも。帝今このどれを古人あると仰る。  
宮中に入る。とましま人の事ある。李延年歌が殊なり。傾城の名あるふる  
歌人の称する傾城にてお女の様に  
今お女とや生とよみかね食ひぬ。ほどの洋う況せむ。やひひうらみやふ老  
おれ女の人形とよづふ。それより歸人の悲鳴のよれと。やま人の悲れ  
なれり。お女の称すまつて  
遊女せ事は謂ふに。まつまつ灌水すが爲も。其山が太體あれ  
雲霧

○此婦人の國え縁年向舞女の音圓をもとじ。古代舞女が國儀も  
時代をもて別々の曲とばくふ異處に他日祥乃とゆくアタマ

源牛若丸於兵術學禮正校圖  
寛永十五年長谷川甚之垂

清水寺奉堂外陣面指

傳云牛若丸鞍馬との大天狗僧正坊に兵衛とまづとあり。異本義經記  
云。鹿那王。牛あれ後从鹿那王九彭摩。軍足羅越々持に外の人  
よりも身も軽く有し。十四年の秋九月。惡魔かど集め。おち力なくす  
合戦。身を利す四又人を以て一人を打勝す。やまと昆陽門臺をす  
きして東京を出立。縁て猪俣をす。何のじようを後鳥居小湯とまく。ゆ  
きり。或秋狩林房と同門。お和泉の律師とす。会せぬ。約もふ。鹿  
那王先年來り。其うちもそよみ。猪俣。お部屋。擇量。最く。那  
十人斗のあつて。ひの上。やり。ひ筋乃。庵ふあ。ひ管絃のする。猪林房  
もわらえも魂を落し。叢を嘲。爾而。那王。傍。西。度  
す。大天狗。兵衛。ひ捨て。とまづ。あり。取時。覺日。まづ。鹿那  
王。歎。此。事。ふ。御。まづ。とまづ。とまづ。お母。お母。病。計。まづ。

平清物語云。夏ま經日暑間を度す。和を絶え武家と韓吉古せられり。  
僧正谷と天狗と夜あく共法を守ひ去がる。起訴人の罪とえべ  
義經記と書。舟明神と云。經跡跡よりて移ひ多。世よりとびの方  
後。神の縫迹も芳ら色消ひて人極めし俗よ天狗の極めうて。夕雨も傾け。  
煙末鳴き叶ふ。されば手うる人をも取扱とあり。主を説す人をもすく。小  
心も手をひかぬのれども。身を離す間なく。終ふ時よりとく。和を  
日没一ふく。夜も角をすく。風もかせび。別局の附  
寄ふ。あくせくちあく。ひく。股をふ。金作のちかと佩て。只アキムの神へ  
まく。絆ひ。通やと。猶豫ひ。中畠太本二卒有。三卒。一卒と。清盛と。右け。  
左を授く。教ぐに切墮ち極むの玉ねぎ。わらみの紙取。木の枝すけ。  
一つと。重盛。首と。名村。拂す。一つと。清盛。首と。拂す。と。ふ。  
那。吸す。も。さく。か。我方。に。帰す。名。拂く。附。修す。

○一元牛舌丸鞍馬山。すく。在と。ちと。と。う。其御者。ふき。ひ。すく。と。そ。  
○牛舌。一。所。を。退。目。と。一。更。御。よ。ひ。千。泉。の。表。御。と。の。と。古。移。い。一。ヶ。那。  
一。五。室。廻。門。小。鬼。一。陸。眼。よ。く。者。あ。て。奉。代。乃。軍。主。と。持。す。れ。而。破。事。延  
長。え。年。後。と。往。中。納。言。入。内。御。時。老。居。從。す。大。宗。四。へ。り。根。殿。將。軍。  
竹。束。の。軍。主。を。わ。く。日。本。に。歸。り。七。代。の。友。お。れ。匡。時。告。ふ。よ。く。義  
理。字。へ。す。胸。あ。く。と。鬼。一。度。あ。く。う。け。義。國。を。拂。り。ひ。り。了。毛。青。石。公。張  
良。に。往。す。あ。く。五。ま。と。之。義。經。く。れ。と。す。の。と。相。公。し。安。え。二。年。十。方  
半。泉。と。出。す。那。ふ。ひ。り。鬼。一。度。と。御。と。拂。ひ。り。と。も。其。事。の。次。く。義  
理。は。ま。た。義。經。は。恨。う。娘。と。參。廻。と。做。極。ま。と。拂。よ。偏。坐。す。又。う。ひ。と  
く。其。務。要。を。拂。ひ。と。そ。  
○拂。ひ。と。制。御。兵。法。を。天。狗。以。る。ひ。と。そ。の。拂。良。タ。地上。の。老。人。と。一。き。の  
書。拂。ひ。と。軍。法。の。考。義。を。拂。め。と。云。ま。の。事。考。定。と。見。す。と。ひ。と。云。ま。  
皆。病。人の。傷。休。と。の。汗。蒸。タ。と。す。拂。ひ。と。御。と。拂。ひ。と。拂。ひ。と。拂。ひ。と。  
拂。ひ。と。其。務。要。を。拂。ひ。と。そ。

○拂。ひ。と。制。御。兵。法。を。天。狗。以。る。ひ。と。そ。の。拂。良。タ。地上。の。老。人。と。一。き。の  
書。拂。ひ。と。軍。法。の。考。義。を。拂。め。と。云。ま。の。事。考。定。と。見。す。と。ひ。と。云。ま。  
皆。病。人の。傷。休。と。の。汗。蒸。タ。と。す。拂。ひ。と。御。と。拂。ひ。と。拂。ひ。と。拂。ひ。と。  
拂。ひ。と。其。務。要。を。拂。ひ。と。そ。

○天狗の役と云ふ。妻名。鞍馬。は廻。を事。令星。是。也。而。ひ。羽。馬。等。も。か  
強。固。乃。え。山。破。岩。と。も。天。狗。と。い。く。び。と。り。て。る。に。各。名。あ。る。て。涼。昇。房。古  
昇。房。舊。而。房。日。禱。房。又。奴。繩。と。云。者。多。矣。其。姿。形。象。も。う。な。雖。而。嚴  
意。に。ち。力。以。而。や。禱。と。有。し。鼻。も。く。山。体。の。形。の。よ。う。む。但。而。あ。の。よ。く。ま。く。は  
神。靈。傍。恵。む。あ。う。と。が。ま。よ。撫。て。重。く。あ。た。う。名。う。れ。ま。と。ま。房。と。て。よ。候。ら  
き。名。稱。す。天。狗。の。よ。和。隱。称。も。う。ふ。大。よ。異。う。漢。士。に。天。狗。と。り。て。史。記。  
天。官。主。云。天。狗。大。奪。星。の。ぞ。声。あ。り。其。り。彼。よ。止。つ。物。よ。移。れ。隱。す。雲。空。  
乃。へ。え。山。海。經。に。云。天。門。ふ。よ。あ。大。あ。り。名。て。天。狗。と。も。甚。老。え。よ。あ。ぶ。な。う。と。そ  
星。と。ゆ。る。長。と。數。十。丈。生。徒。と。身。附。と。山。雷。の。ぞ。甚。老。電。乃。と。そ  
是。え。文。志。を。平。河。貢。二。太。國。會。營。度。窺。擇。要。よ。あ。狗。の。天。狗。軍。の。よ。あ。く。日。景  
み。り。よ。ふ。の。天。狗。と。さ。ふ。異。く。平。河。綱。目。法。鳥。傳。と。云。胡。地。の。源。ひ。に。ゆ。人。さ  
か。の。ご。く。青。立。樹。と。穿。て。審。伏。修。ひ。と。五。六。升。の。蓋。め。と。は。れ。經。教。す。第。々  
ふ。土。壁。を。穿。く。て。赤。白。ね。同。ろ。狀。櫛。猴。の。如。り。あ。バ。伐。者。以。樹。と。見。て。即。壁。  
猿。を。犯。し。れ。則。被。虎。人。と。言。は。人の。廬。舍。と。燒。自。日。に。生。滅。され。鳥。の。聲。  
り。秋。暮。聲。を。呼。よ。鶯。の。聲。の。よ。く。或。も。人。の。聲。く。る。長。と。大。洞。中。か。へ。蟹。蟹  
と。ぬ。く。人。の。や。う。聲。て。多。寫。ふ。ゆ。人。う。れ。と。越。紀。の。組。と。修。ふ。され。日。年。ふ。獨。ひ  
西。乃。天。狗。か。御。す。

。雁山文集云。史。王。約。ち。星。の。名。く。秋。加。淳。屠。仲。猿。者。世。後。を。忌。怕。庸。五。と。

扇を取つて佳さんを歎く。乃ち内閣の名前を號すと訓ひ。組一席の出合。其の如くふれぬる。本客も又居る。おお庭又藤観音寺と申す。美後さん。

○撲き小治山虫谷乃由木と天狗の波より。或るま家の樹。ま家の養も。天狗の出植。えんとあらわす。まきは樹を祀がる。ば祭あり。ねん怖もく供うべ。  
或も落ひえ時にて殺人のをめり。又あば代り。巨石所倒れ。おとむとぬ。そとえぬのふがまに。ゆふを辛唐人店とぞろそろ。おもてのうちふなど。おとく異  
よどもあらざる。送代の瀧鞆。くちゆき。すなれば。いふうきよく有ま。れもく  
べづく  
○又佐登の海波より天狗乃死。とすゆ。りく人おはす。おはす。人サニスニ  
死。あまう。櫛五毛。頭向かうて。小れ。櫛牙。ハ。ぐ。采。ふ。わ。ば。食。死。の。波。す。り。  
天狗乃死。かく。除。ゆ。ゆ。中。ふ。す。く。と。海。道。に。う。れ。一。種。の。貞。す。く。と。り。ま  
く。中。も。異。魚。ま。す。く。ま。す。の。死。す。や。か。く。ば

○固云祇園のあ私賣炭は小僧正方が猪にまわる絶馬也。傳云古波羅  
元信が筆をうこ見てかん草をくぬ。此絶馬はニニ年も何處不持ひよと  
つて情狀

○寛文年間市中之圖

清水寺本堂の東向北向よ掲ぐ

寛文二年

未編小渭も如く。今に至り百五十餘年。男女の衣被は深摸様の寛古雅なる半。其時の風俗をえどさうのちに画うてへかう支障へだ。殊よ深摸様。蓋の様様。幸く用ひかうるもの。至考ふ末の風と絶する事無。古代の暦人れ風俗を一二画をせり。終時代をもつて。風俗深摸様のものぞ。草りたる件を娶へ。東く佳日梓行せんと爲べ。

○正月小児の弄戯。小男児を毬打し。女児を絲絹羽根紙にて正月乃致ひと。

○毬打を顯照神中抄云。十節後云。黃帝。蚩尤が頸を斬るを以球今。の繩枝毛す。被例とひく。漢土年始に件の事成用。圓中画事ふ。後く日本國其例と見て。毬打と打と多く。坐後同音す。又蚩尤のと謂ふ。續日本紀云。聖武天皇。神龜四年正月。叔王子。諸臣の玉等と春り。并

小集ひ。打球の坐城修り。す。打拂ひのうち

滑稽雜談抄云。万葉に云きりと。孫も。年幼の毬打と云。日本亦あふて造る。近頃のよう。必竟今世女子の筋。毛毬。身近な者と。若く本球そ本球ばかりと。其と。後成風。す。後。の世。後。圓。に。本。丁。と。ね。され。其頃も本球也。惟男児の筋。拂と石。向ふ。拂。便。り。ん。後。鳥。相。院。の。雅。を。内。時に。球。打。代。拂。も。拂。ひ。れ。ば。及。上。人。放。り。て。拂。拂。の。よ。た。拂立ては帝代毬打の冠者と。罵。ら。見。そ。よ。う。平家。ね。波。あ。ゆ。又。信。よ。拂。と。称。して。拂。代。ね。る。もの。な。う。拂。枝。と。云。い。の。や。く。枝。の。先。よ。け。る。もの。と。古。来。の。摸。様。小。麥。と。二。三。歳。の。幼。兒。み。づ。た。拂。り。と。紙。と。又。拂。拂。急。れ。行。す。と。送。り。ま。す。拂。打。小。限。す。ふ。称。し。其。條。を。玉。振。と。宣。引。拂。ふ。太。や。う。拂。り。う。う。と。も。本。丁。と。拂。べ。と。も。今。玉。振。と。云。い。耶。方。よ。う。の。拂。サ。や。く。其。然。正。と。本。戸。ふ。け。り。戸。車。の。よ。う。宝。を。の。内。れ。七。重。く。い。わ。の。ど。

寛文二年清水寺後堂に掲る正月流中路上の事  
初編に收りて今も寫のまゝすがるふ有能てまふか

○御前と正月元日より和。正月中鬼たまき

立引と其方み六丁目高。あ面小引立。

大口に御る玉と虎。五又玉と拂く

拂芳と舞ふ。五列三やう。五列三

五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

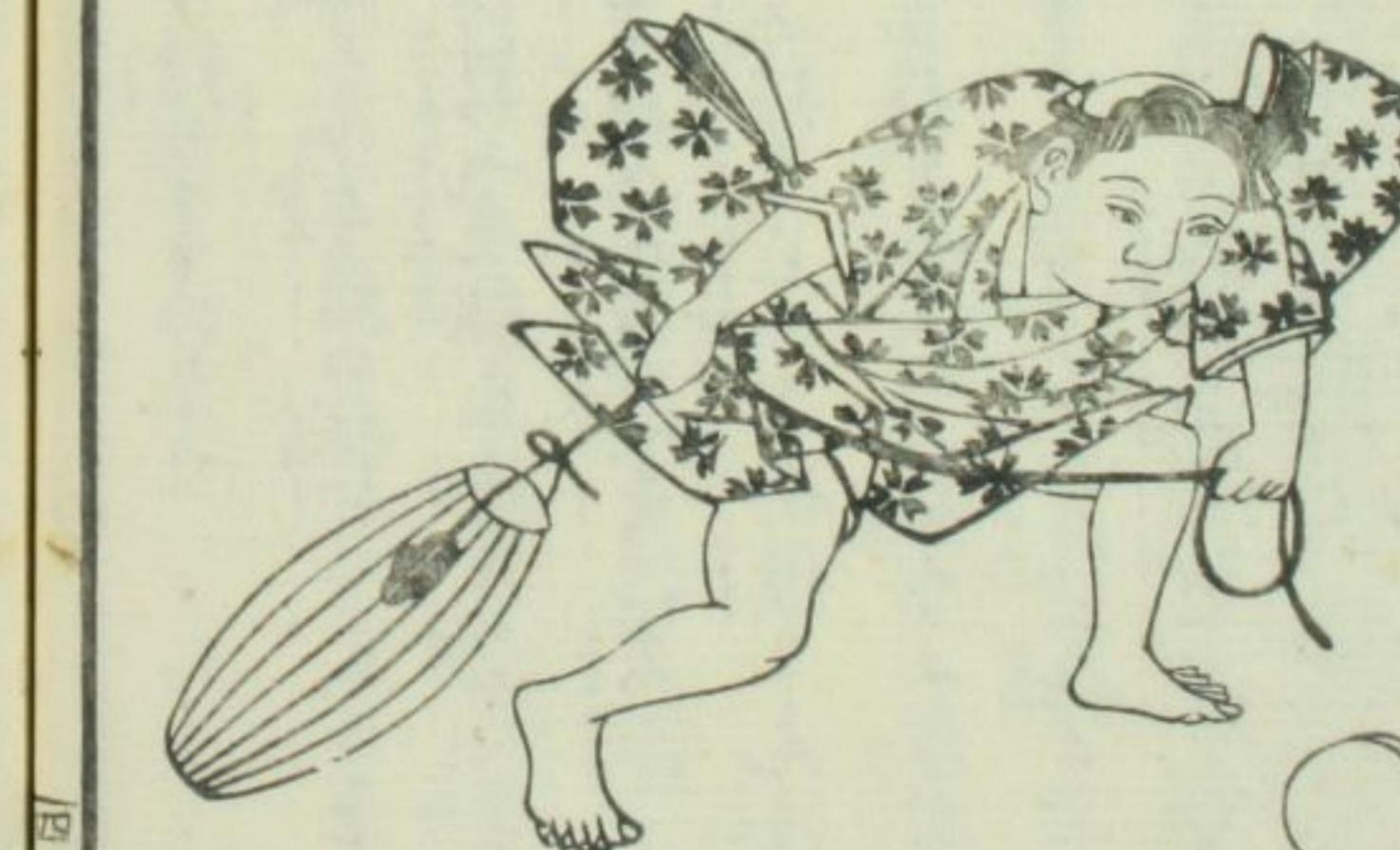
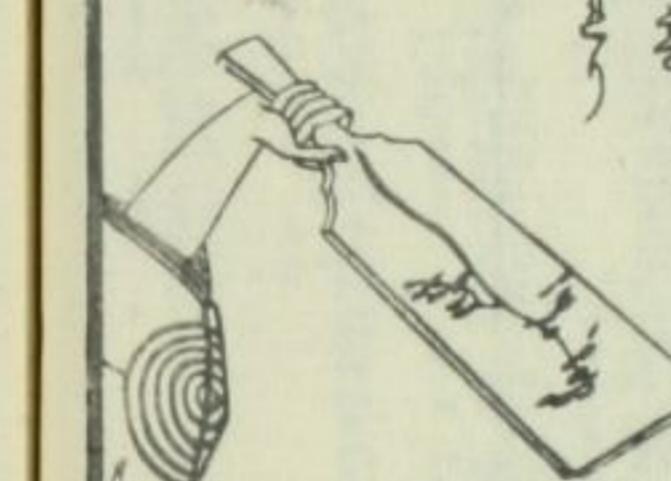
五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

五列三やう。五列三。五列三

○一祝ふ羽子板を  
神功皇后の羽子と  
表して女児の羽子と



女のあら鞆まぶてーらる。古代のよみをう。とべていすのよ。だしも  
ぬぬく。今も北山家の婦人はうきだそが田。近世までまぶた  
鞆にや。ひありト女を召されとで。がくらきの深模様或ハ綾織物  
夏ば。實ふのひ乃嫁入る。よし紅暎のうぐれとけりとく。  
けく。あまと接と蔽ふの具。紅と玉屏と通んぐとえく。まゆも  
絶の往と重い踏み出る。田のあまを其黒くろとく。

○え日う十日には御ご五郎ごろう白被しらぬか  
紫むらさき日等ひのほかを被ぬかり自じ面めんと  
震おどい布ぬの持もりて風かぜあて被ぬかりとく  
門かどの傍そばとあられと  
さくまれとまのふけり  
とりふあふ天候の度たどりを

喜びしきの未みだ  
雍おう正せう村むらあよふれとや  
モ逃なげくねどりふ。



る。振りはる八角か割れ端が細く。中端からふと細た方とのたすふ  
お糸の室を穿ちひふれ木綿よみぬの玉は付く。お停金筋筋ゆく  
其上本筋走。松市射燈等の縁を彩色小どき用う時もたての玉と取  
扱し。別うて主代擲玉。八角の本筋本糸の上へ行枝本枝のあた擲  
と走り柄く。毛と玉とが錦杖とば黒すてが筋已が滑ぬが用ゆく。

○一筋小絲杖ゆくと御あらう

○御使ふ乞うへねらぬの如く。ちくい玉と取らあみの左へ織代がく地上と  
ゆく。馬よ車の車をけり。漢土すむかのじゆる。兩頭よ達あひづく  
ちくい車面と主ふふる見ゆ。と保種より。三才園食事ふせり。田畠とキムク作とく  
ちくいのねらうり。年のねよ鶴葉とさりび。田畠とキムク作とく

○故鬼板と世蘆同音。雅き音のこだのことてはきゆれ。やうすを  
や善そまことまことゆく。妙ふうれぬすでうひどき。秋のすゑふ鶴  
鈴とふ出きて。數をうけ合ふものすら。こゆのことふ。お蓮みどりと  
えぞうからうとくのうけり。とくに枝あくほなあざれび扇子侍と

がくうのううり。とくに殿代としりんがあに。うらのことてほきゆく  
○殿代と櫻痴さんとおの御ふう。よしとゆく。生ずる四月よ御く。珍と  
ゆく。うらの御く。極く。極く。内板と御きく。内板と御きく。御く。御く。  
ゆく。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。御く。

○村上義光圖

享保二年 渡辺透画

清水寺

○渡辺天皇鑑倉北岸相模守高時入道が御行を傍ませぬひ。山  
城の南置ふ本丸代舉。後ふら御懐く。帝と陽岐園に移す。御  
法院御帝身三門よりは良親王と。菊都御寺に御在る。と  
一家院の御人ほ眼好む。寄木くえを取る。とく。とく。とく。  
奉仕本院と移ひて。辨と退。とく。とく。とく。とく。とく。とく。  
房主のあれ則候本寺。相模園寺の。と。阿房。武強坊。村上。左近。元

國八節。支田彦七。平家主即等。山代の姿。よ成く。十津川の姿。まを  
供奉。一。す。戸社。血磨。表。傾。通。憲。の。郷民。とかまく。然。勝。別。南。主。通。  
國。え。代。宿。本。駿。ト。出。村。人。主。入。活。え。を。射。する。者。に。之。候。勢。乃。  
車。の。底。代。主。射。の。人。を。射。者。も。五。石。並。代。主。底。金。を。弓。代。駆。け。  
見。代。駆。か。強。盛。の。郷民。等。忽。ら。か。代。反。ト。さ。ば。金。を。十。津。川。を。生。き。る。  
財。の。方。額。足。経。ふ。御。大。主。革。服。す。は。川。を。駆。わ。や。ち。駆。歎。す。は。浴。方。ふ。  
く。欲。革。服。底。目。が。洋。お。仗。と。底。と。求。め。経。ふ。底。司。主。て。と。主。底。通。す。  
セ。革。服。底。全。小。國。ふ。が。荒。神。薄。附。と。小。持。か。又。主。と。道。を。主。ん。も。豈。と。  
方。と。が。御。世。の。内。一。兩。人。駆。つ。く。威。象。へ。渾。れ。う。又。と。御。難。風。経。と。が。食。錢。  
往。す。首。の。浅。と。主。ま。や。ど。一。矢。仕。ぐ。と。ヤ。多。い。お。ね。律。師。利。被。主。  
御。大。事。小。代。く。若。身。と。主。と。平。駕。主。即。う。上。に。す。セ。御。難。を。底。見。す。  
下。主。え。と。遠。に。毛。行。五。主。と。度。四。節。と。遠。の。道。より。て。追。付。を。見。

ぐ。ふ。小。革。服。底。日。月。と。金。銀。少。く。相。る。肺。の。門。難。を。主。く。仰。ふ。金。  
村。上。懼。ぐ。因。ば。ち。の。よ。と。告。ぐ。村。上。大。不。安。ノ。羽。故。退。房。の。脚。首。途。よ。大。  
凡。下。れ。奴。子。が。不。保。の。事。は。づ。た。す。や。方。と。御。難。を。引。奪。い。ひ。難。ね。る。人。  
の。男。代。机。ぐ。四五。丈。斗。施。か。レ。バ。體。力。不。足。と。革。服。底。目。を。路。先。召。駆。経。く。  
て。通。向。る。村。と。御。難。を。わ。そ。あ。ふ。追。付。函。一。主。す。く。主。く。

## 清水寺

○二王。力。競。く。國

釋。氏。要。覽。云。法。秀。禪。師。え。嘉。年。中。初。先。建。業。主。く。祇。祖。寺。に。望。よ。御。軍。  
府。神。の。像。を。画。く。今。主。代。御。く。  
正。法。念。經。云。首。國。王。あ。う。第。一。の。支。人。一。み。れ。あ。バ。生。當。未。成。佛。の。次。分。を。  
減。ん。と。猶。に。第。二。の。支。人。二。み。れ。生。ば。其。算。一。ハ。梵。王。と。修。う。て。千。兄。の。佛。と。清。

て法輪が轉ると頃々。其次も臺灣金剛とからりて千兄の教を渡ら。

○  
船之圖

清水寺廬院

寛永十一年 末吉船客氣中とある 小村忠清画

古來羽漢土。天望乃高船。又小波海にて交易を為し。大内家大の國は城  
海より。或ひ小勘合の仰を以て。通商の途とす。又中國。日本よりも船と號  
船九艘あり。長崎より末次船二艘。又幸船一艘。荒木船一艘。宗室船  
一艘。泉州楞々。伊豫庄船一艘。京都。中南余船一艘。又奈良船一艘。  
伏見庄船一艘。渡海に至る。又三十年之内。家経て後勘合の仰失て。大内乃  
後海止り。まよう通商。糸に。小。や。圓。渡海の事無邦。ゆひ渡寛  
永十一年に九艘の高船。も止矣。終ふ。

○清水寺奉堂に掲る和角倉船の圖。末右紙乃墨。又奥院にもある  
紙の圖れ絵馬あり。和角倉紙に墨の墨も  
○奉堂の外陣北面に掲る紙乃絵馬。寛永十一年東京和角倉船也。

。法事にて引あの經説大ふ異にあり。今寺門のた右より在る二王の像を  
御とぞ御祖目とぞし。今般肥健にて頭の上ふ誓告せあり。諸是より一毛  
ぬは同じたのみ。木杆と柳。一ハロを因てのす。大國をひそむ力と生れ移が  
う。共々男伴にて陰陽阿吽の義をとる。  
○相傳ふ奉坂皇の時。天室利房等の門徒十八人あて長安より來  
始皇を至り。獄中に囚。金刑力士。獄頭と破つゝ毎をかほす。  
○因ふ今寺院の門。今刑力士乃縁て至神社の門。赤黒の犯と云ふ。冠  
巻き櫻花懸け表御。大石帶と。手び半猪を主と。左力佩。加羅帶と有也。  
矛をわく。胡麻よりか様を。傍みて。赤毛。豊磐同戸命。  
御監門。命。右。語拾遣。右。呪主神。天石窟に入り。清く。神作。甚扇を。門階より。新殿よ。住居を。今豊磐同  
戸命。御監門。今。の。三。神。殿。門。を。守。御。れ。是。蓋。主。玉。命。の。す。延喜式  
云。門。口。巫。掌。神。八。兵。御。石。室。神。豐。石。室。神。四。面。口。各。一。兵。主。  
○。後馬小國。巫。掌。神。八。兵。御。石。室。神。豐。石。室。神。四。面。口。各。一。兵。主。  
を。守。御。け。力。守。御。て。不。有。小。御。主。半。主。  
。又。之。代。御。押。主。上。是。越。と。有。力。主。と。有。

中よりは絵馬小画く其頃の間姿見えきものまゝ

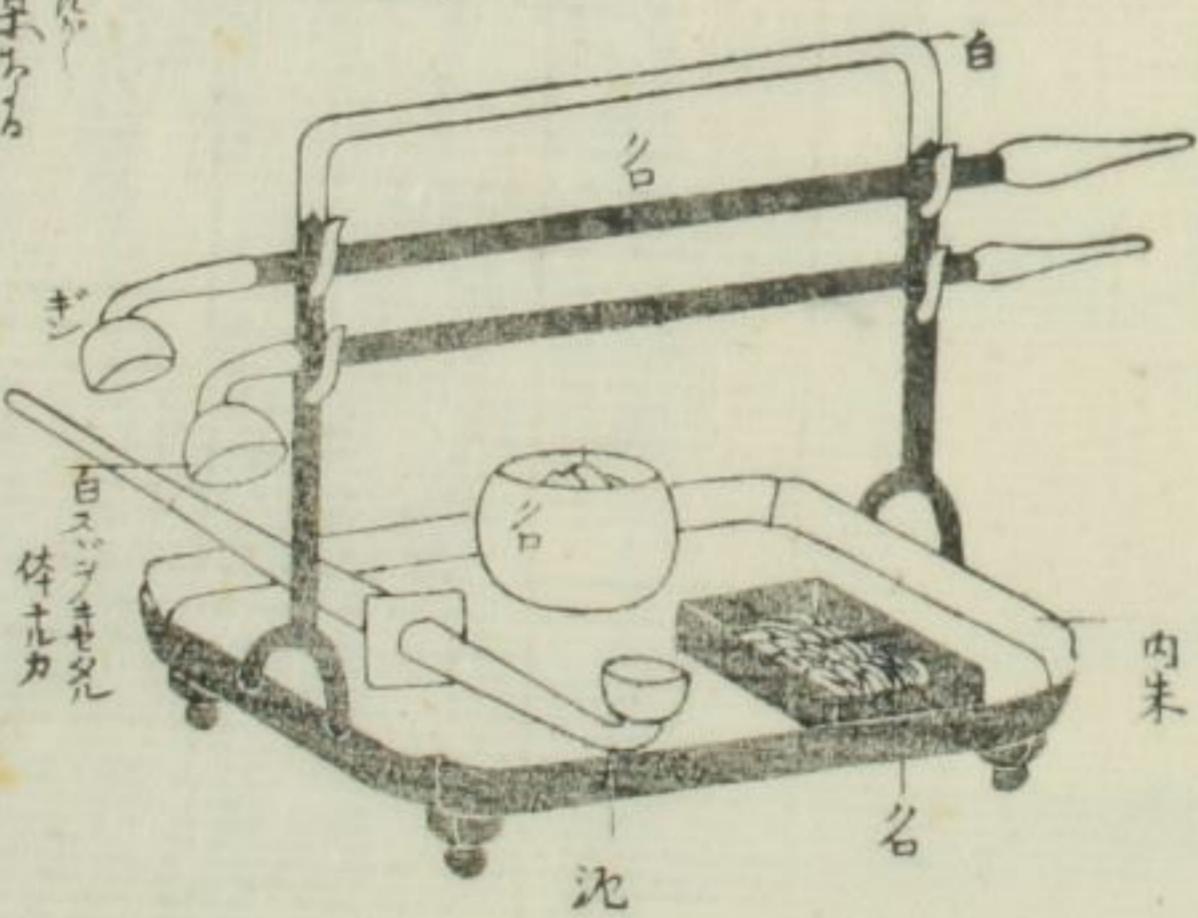
國よりびく考えニ縁よ出やをえふり

○前編より出にれの國を奥院小掛りにて寛永十一年未吉日申  
客血浄中して。寛永十一年五艘の船をも止め積み革をも止  
何きの國乃し船持あらかあらふ九艘み外もうち進むて考  
○帆のとみか國の人なり。世よどりが黒坊といふ。今も外國乃し  
して船中の物をばあらふ自立船得とある  
○思方を駆けの内。咬噏吧。榜葛刺。レイス。一キス。ロワル等の土人  
日小近た國本生くやをを集まつて黒毛かう。西洋諸國紙スワルトヨ  
ニゴト云黒毛とあひ者よりふる。性愚うて力はく船乃もて船  
をうねとそよぐり立りまくと

○都良香

祇園

享保九年 望月勘助画



○昔、船だとの事は少くも聞え。底又  
朝を起て或は度かへり竹をもだくまゝ  
あらまを船を盛て去りて其後も病と行の  
所で言ふ事の今もき燒くふはれあら  
木の室かと考へる。えわのまきの水の  
初めもまき船の停止ありて間もなく沖洋下  
船不開さる。寛永土年の事も免れて  
年も船をすこしも見ゆて船もさへあら  
中も木の室中か穴と鑿らばぬやうある。  
今期の事は見えとらうべからず思ふ。  
え様年寄千家定子仙波のねよひの方に病と  
あらまくへぬの事ふ付するよ達もと。おへあら  
まくが必ず手粉をさうと烟草を吸ひ。年又  
次でこれを助む事生えと成て考へく。今のまきの  
まき船へと見ゆれあらじとあら

○國より宣を承の頃。まことに停止あり。嘔白あら某ある  
者。或封體を通じて食の施うと。宿小屋もあ  
と多くある。御教令とあらび櫻もる者とれおま  
の。世のものありべらん内川岸よりさうと考へ。舟を  
まづく掛らざる。船の事と置くがは岸もてみゆかとわて全ふ事ある

三絃を永保年中。流珠圓より減る。え地は祇園の車わらい猪の革と換用。泉聲  
堺の音人中で珍れり。其後虎はまも音人本と。紙とひきぬび半は法事う  
出されば署く。

○被物の上は方と海老尾より。あじの尾又伊豆より。とねまく。寛永年中身の附  
ハニ腰の被衣畢して海老尾深笠り。又首のひく。今け装のとく絵と見だす。  
トに國子よりふく。寛永十一年の墨く。又兼魚口年。四象河かみ源り圓。祇園の  
竹内絵馬。もかのどじに。接ぎて。其頃弓めの装をもぢ。うだ。え流域よりもくあう。装のほく。もく。うだの芳と候う。

○あゆふ虫に清水寺寛永十一年末吉の國中細画す。とお曉ざれ。と  
を表に紹出して。いまと考究徳を





かすりと草元の御手うのあらわれをましと。やあつたよなたも  
せめくまくわくまくと御まのあに。房主の長すくとまゆの門。  
かくすくとあらだ。お付を。すじつうだ。ひそくとくとくとくとくとく  
おととととととととととととととととととととととととととととととととと  
あらとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとと

かすりと草元の御手うのあらわれをましと。やあつたよなたも  
せめくまくわくまくと御まのあに。房主の長すくとまゆの門。  
かくすくとあらだ。お付を。すじつうだ。ひそくとくとくとくとくとく  
おとととととととととととととととととととととととととととととととと  
あらとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととととととととととととと



繪本原文

この全く男のこころを  
ゆふから。天正のじ方威作  
まくまくと御まのあに。これより  
またの人にまかわらでさん  
大お前しきうきうれす  
まくまく

おとと

西一七二

# 正保四年正月廿九日

△裏紙の圖は唐水車に掲ぐるかのまうせよと書く

宋書五行志云男冠は晋の康寧。

大康の時に朝。女をもりてさざ。

されば後漢とある。

五雅組云男色の直すと。并列山

頤童にはじめの戒う。あんぬ

上古已す御事と。晋に至つて

大盛りて京師ノ男子。程を

奉て自ら貪の者

唐宋より己に

これあり。今京都。

小唱あり。さう

縉紳ノ酒席よ

微り。官伎取よ



西ノ子

禁まんとも駄ひ  
まもとわどき  
明朝すも盛りまゆ  
うめぐれ。まねも  
おもれしを滅び落まく  
あ。中世の天正より  
義姫のひまをまんく  
うや其頃ノ或老人の犯  
男色の輩が犯し。見る  
見る。見る。見る。見る。  
其の後去もみだにいのく身傷よ  
やまとまゆぐれとむく古事記屋敷や



或と風流画。やもそく  
清水寺に捐り。後馬  
あもえぬ。女をよ  
減らす。ゆく  
まをせむり。あ  
今後。其と  
なまふて。おもむく  
ことかく



- 傳云都良香。都腹赤の子。當時才子也。儒者文人なり。昔正相橋廣相巨勢文雄等と上下の巣鴨あり。清和帝にはじく桂下に御翰林にあひて。元慶三年小殿に詔を奉納。宣室御集に在す。其後人良香。河太宰の家完本見す。者あり。世も仰す良香富士を嘆み入る。ゆき化すかばんや。や否や。
- 古老說云良香。武時氣鬢風梳新柳髮。とらず向拔。ひいていまと下の向拔。ひいて。羅生門のあはれ。うに鬼樓上。かく聲。て。冰清浪洗。日苦鬚。と。す。下の向拔。云う。良香。名。と。み。る。菅原也。相。よ。かく。侍。え。絶。り。て。ゆ。と。や。き。が。ひ。言。ひ。下の向。を。譽。の。つけ。る。と。社。さ。い。く。と。作。と。され。ば。良香。洞。ば。湯。と。も。皮。ぬ。と。も。う。と。ま。す。と。ぞ。や。う。と。江。達。お。ま。ふ。
- 此詩朗源集に早春の序。とて都良香が作。とある。

○浦の水のあらわしの新川。浦乃柳を吹きびらかへ。蘿と拂ふ御若狭。  
くらわよ浦のあらわしをあくふみ拂ふとこ

○蘭亭圖

寶曆四年

池興名

大雅堂と号す。字代貢成九霞と号す。又九霞山樵の字と號して處樵と号す。秋半と稱す。  
蘭亭も漢土紹興付の事也。洪武あり。清流激湍たる水映草木が半今  
なやそりと云。

○車文類聚別集十二本云何延之園也。記云。東晉の右軍將軍  
會稽内史琅琊王羲之字は逸少。書れの詩序なり。右軍蠻聯の美  
胄うて蕭散の名實也。晉穆帝永和九年暮春二月三日太原孫綽。  
與公廣漢王彬之并凝徽徵擧等四十有人。被禊の後を脩免  
毫末揮ひ序を制す。

○王羲之蘭亭之記云

永和九年歲在癸卯暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。  
脩禊也。群賢畢至。少長咸集。此地有崇山峻嶺茂林  
脩竹。又有清流激湍。映帶左右。引以爲流觴曲水。列坐  
其次。雖無絲竹管絃之盛。一觴一詠亦足。以暢叙幽情。  
是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰觀宇宙。俯察品類。之  
盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之娛。信可樂也。

今圖。予慕其文。而不能畫。久之。  
○仁田四郎忠常斬猪圖

祇園

元祐十五年。海小友賈扇画。

建久四年五月十八日頼朝卿家士の祇野。猪一頭。時年四歲。重四

わしとくふれきをすべ。即彼の人を敵と捕押の馬殺さう。仁田原。思  
事庵を廻よと。まことにゆりし城門跡よれ。仁田が郊後等。馬のちえとあ  
だ主人の捕獲をと圖譖。二三十人拔連く。門内よ切て入る。船を仁田が又運  
まともと。大幕旗陣。御用とどけて。宝をやる。毛利ふ不二の城野の船  
をもとと。江上を立候ぬ便  
○曾我物語ふ。夢見より。洪流うちたに移る。客車を至るの。人相争ひ。面記の  
始より後つゝ。石橋より級に。海あらあよ。武田と。加賀と。そなへ十兵  
船にて。武田。は。企候負ふと。執獄。達仁と。年六月。將軍。被縊。候。江主。後はよ  
存す。で。主の。櫛に。まづ。持す。一の。巣窟。ふ。其は。と。序す。と。か。若ふ。櫛ぬ  
で。人穴。林に。仁田四郎。た。事。よ。て。巣窟の中。と。持す。と。め。持す。お。事後。若  
五人と。手ひいて。船の中。よ。入り。一。至。舟と。ね。く。因。ゆく。云。窟の中。甚。持す。と。て。勝  
く。躊躇と。回ら。船。各。ね。船。と。よ。く。儀。前。副。を。入。と。數。十。丁。號。絶。流。は  
て。墨。漫。漏。幅。江。面。ふ。塵。る。船。と。数。す。る。一。丈。河。を。く。お。橋。を。く。行。と。桃。は  
細。も。ク。は。向。の。船。ふ。か。ら。異。變。を。以。て。後。若。船。前。副。を。入。と。數。十。丁。號。絶。流。は  
と。取。船。と。手。の。船。ふ。か。ら。異。變。を。以。て。後。若。船。前。副。を。入。と。數。十。丁。號。絶。流。は  
年九月。小模。記。

○ 榊原景季死の圖

歌園社

年号

著者の名は不載 画考初稿は郭子正所

元暦元年二月、賴朝卿乃代官として祀頼義經。折門に發向し。平家が執る一の谷に責す。時ふ榊原平之景時其子源を殺す。源氏高一陣か進み中守平次をもる。

土乃様にはてて梓弓引て人あらぬものうら

とて城戸に近く押すく残る一の谷れ城を屬竟の要害す。生田の杜バ一の城戸。三方に海を極東の方に引接架し。紫雲もかく連隊本を了小のひり櫛原より南の海際まで。揆指揆て役向ばぬ。一旦用もさば城戸ふへ居たずもふく。海半より防ぐ矢を武種園の住人河原を即。口ニ即見守。畠田ニ即ち等射倒す。人見四節もす。源氏を浮進。達哉木代破り源を殺まば具して城戸の中に引退ひる。

○ 平家物語の榊原平之死  
院主はとお伊達。院主立而餘將大勢ノ中へ薦へま  
城戸の中やと新中納言足手。平と後中將が二千餘兵。榊原五百餘兵  
取囲く。既に榊原勢はどて綱と引く。源を率ます引邊。敵乃中に因  
まよぬ。京師を以て見く。源をも必至射とぞ。今に生てほうせんと。き  
げ城戸小責て入る。此時源をも季子を。奈地う即高保と即ひ。燒をもす  
度と大意とす。三十餘精小取込らじ。菊は首代射とちの生者  
モ一葉をもんじて。又よ負。京師をほそびがめ旅した。極く雪みて  
城戸を出よタ。是が榊原ありて度の懸と云。時秋夏絶えふ承のりであが  
み。極も武土乃いがむ敷きられ綱をみがれあひども。榊原ももくび  
小指と姆もも連て侵うて。唯亂とする梅枝を加ね縁かまてを折り  
多く。折り元もを教わぬ。常ち袖を拂ひて拂ひて  
吹風をふりとひそめ拂ひもるまよとせよ。音もすまつたま

と在た御子で召し出しこと。奉承の云達をうた服とて優しくやうへ。也  
タリ小威じゆひきうちく 以上盛衰記取集

○雪山童子の圖 稲田

寛文七年 井上勘兵衛画

釋尊の因縁。雪よまよなぞ一時。山中を彷徨ひて終ふた大林のまゝ  
す。偈宣説もあつたり。彼ふよへ見詮へば。羅刹あり。童子よ。羅刹了  
じひ。善哉聖者。何の如みうは。汝如名殊と。我ら小宣説せよ。羅刹。  
四句代説。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅為樂と。童子毛を  
躊躇ひて後。安抜を拭く。身代羅刹よ。能そを悟かむ。羅刹も。帝釈  
ア難波現して。すと。涅槃經よ。さう。ちゆは。華経小止と。そへ坐す。

○養老龍子圖 清水寺

寛文七年

續白牟紀云。元正天皇。宿ノ日。朕今年九月を以て美濃國不破の行  
宮ふ到る。且と松日を運す。因て當日郡。美濃山の美泉を観て自  
手画代盤。もとばは虜滑。タガ如。又痛む。がほは。はよ。深念どと。もと。か。  
朕。躬。ふ。在。其。猿。あ。又。就。て。こ。り。飲。湯。を。者。も。或。ハ。白。髮。黒。髪。ふ。え。  
或。ち。額。變。更。小。生。ド。或。ハ。圓。目。明。る。が。如。一。自。餘。の。圓。夜。成。不。情。平。食。食。  
昔。國。く。後。漢。光。武。の。時。醴。泉。出。く。と。以。飲。と。お。ん。に。圓。夜。平。食。食。  
高。き。醴。泉。を。美。泉。か。り。ゆ。老。翁。養。べ。一。蓋。水。の。精。き。り。雪。不。惟。る。泉。  
部。小。貢。ア。石。酒。と。あ。も。む。と。も。  
般。え。紀。云。養。老。元。正。天。皇。の。御。時。莫。履。國。み。ま。と。見。男。あ。り。老。と。ね。く。

クは此男の手と切て代々。又此言ふは更事に酒を度てあり候ふま  
で景和さんとすりに候き石舟と並びてすうじぬ。あるうちあがれ出  
そ色酒が御う。源がむかむに自らほろく。日ふを以て御酒と之よあひ。門内  
の幸山圓石と雪室石と年九月其の御幸うて御賜う。至る乃  
公招と天神地祇ありしとひく其徳をあつはすや威をも優游ひく。  
此男はえはの國司にゆられ。湯の山をあたまはせたの滝と名付く。行紀十  
一日小まき城生若と改らきたり。

○楊木先君西園に有考郡今ふし。御所の御子を幸葉郡なり。布屋の  
考郡から。隣を多井より南二里あり。勢石寺を有へれたの西乃  
山の神集う。周の木を多井御め。この御乃ねあり。伊豆の樵夫の事  
わらと。又考若寺あり。朝もさを御世をと安だ

○富士山圖

紙圖

吉承保十八年

狩野永隆画

○富士或富慈。富二。婦盡。富兒。不尽。障土も書又芙蓉岩  
も書。躬領が松花抄よ富士乃十名底出。藤嶽鳴沢の高根。常盤  
山。塵山。二十山。三重山。新山。見出山。三上山。神路山。多喜山。塵屋  
山。多喜山。山。多喜山。多喜山。常山。多喜山。時喜  
山。

○山を後川に隸。四箇圓山跨る。南北を後川。東を相川。小西を甲斐。壁  
黒豆川を跨る丸圓東八別より望見す。かの御異す。以て唯小西を山の御  
長く。南面を殊よ喰咀す。甲斐より登。代吉田口と云。後川より幸子代太官に  
と云。相川より參す。跡走と云。各國同神社ゆ。

○富士山圓桂。幸子作。本元。岡耶姬。今大。大と紙今の女瓊。大の妃也。御  
平城天皇。大と幸子作。本元。岡耶姬。今大。大と紙今の女瓊。大の妃也。御  
圓桂の兩大師。大と紙今の女瓊。大の妃也。御圓桂の兩大師。大と紙今の女瓊。大の妃也。

○山の頂上八葉は蓬。幸子に仰ぐ。中央本大窟あり。窟の底池水と漫

満ちて色藍乃  
いぢみ

○旧本草記云。孝靈天皇三十六年正月。駿河國東西南北之刺。國中少  
大海虫。一夜又海中より丈余歩丈餘埋む。一日天より雲附る。終土岸に續く。八  
坂瘦の如く。又積半里あり。大者。絶頂に丈女見る。立の丈重た有る。又鬼

伯太の兵た有る  
○毎六月上旬より七月小至るをふと登る車が降る其頂上事小煙氣あり。

伯太の兵た右小郡

○四時雪消。唯六月十五日の一日前く其の初まどけ  
○は。孝明天皇五年。富士山始く見る。蓋一江之内湖一極よ  
且云。是と云ふ。今小江戸の入て。よむ。ふせり。桂木に。其の外の  
百日。隠神して。ふる。祭り。ひ。幕。時を過ぐ。の。あ。だ。ま。げ。の。行。る。と。も。う。  
○あ。ま。集に。ひき。者。人の。歌。ふ

あら  
えはれり  
ひるみゆ  
おもてて  
なまき  
すうがねの  
新しめの  
おもて

四月の えもんは  
雪の音 かくはよ  
どうきゆんやのうと  
見る見りて作せらるる年ゆゑ

○笛もそなへ  
笛を吹く詩あり。李太白の詩歟。是れ景  
もよし。笛を吹く詩あり。漢書の漢武帝の事

○宝永二年十一月廿四日はす。富士の西より煙が出て。二日未明弁うち海雲  
止む。久々に陸續少烈。民家られがれ多く火搖ほど。さうにゆくは止く。  
紀伊郡の山より多生ふ火勢。其首蓋て。軍馬を移し。火勢は止く。而も財と済  
魂を失ひ。今やまほろびて。偏りて往くを経入とす。勘定万の數と知れ。山  
上より櫻繁。一々計ら。富士郡を一面の島と見。煙乃中に入り。まことに  
有る。火災也。やる所とあれば。北西に延べた。四年の四方の田畠と埋も。至  
相持。移向の所を移ふ乃精。二丈餘。まは民家煙と。田畠の移ふを  
奉りて。移ふ。かくも。す。移ふ。移ふ。燒精。其ち移ふを改め。改め。寛め。寛め。寛  
甚。寛の口にあらむ。櫻ふを生む。世廢。よし。富士山。幸運。御。御。御。御。右  
邊の木被ふ。被ふ。櫻。櫻。櫻。櫻。櫻。左

○平忠盛之圖

祇園

年号是解

白河院を祇園感神院代信に持ひ奉に御幸あり。かくが武時祇園西  
大門の太路より、女の水汲桶と載りて不意ひま中から出る。祇園の秋乃葉  
小内殿ばかりして居る。星を祇園を女房とやに或取思ひて女房の方  
御幸す。折も五月雨。夜は晴け。祇園林の東むら居の邊。う  
光物也。或も走る。或も滑る。其處も時よどび。或も白銀に針のねじを繋  
れ。或も小船を舟もよ。修業れん。魂を附く。鬼を坐れと城主懐に  
置く。年右盛中面す。山側小径す。馬と馳出。走あひ。進んで鹿下  
組曲を。且つ鬼よも。祇園の家社法師す。山側まんまと坐す。坐す。お  
除す。ほほえま。草木が載る。のみに龍を拂た。乃ちかくを盜ふ。火威へく  
消すと。あくらは是す。火の光湯も。またかく和丸も。見れり。人て後れ

御いと傳へぬ

○今俄空の社乃東を名す。祇園の門前にて路傍よ。一社の岳あり。乞  
う。御因如作の社と云ふ。人深く祀る。故に名を立す。

○一社より出る。姫子が墓。附す。

○約狐之國

祇園社往馬所す

延喜元年西川右京祐信画。自得角身。仕女を萬々一家

約狐の言を。師象は傳とぞゆ。其優優と。狐と約も。と。業  
も。禦師あり。右狐塗が。狐と。禦と。止んと。禦師が。板足の白糸。主  
と。玄。傳。小。作。と。狐と。約。と。御。と。誓。し。禦師。其言。小。作。と。強。板。白。糸。  
主。が。帰。路。見。捨。狐。踏。本。足。と。見。す。主。の。眷。屬。狐。此。強。よ。か。く。命  
を。宿。も。と。歎。そ。聲。り。枝。代。所。く。聲。を。あ。ぐ。小。禦。と。御。禦。師。板。向  
義。主。が。体。を。憚。で。行。く。權。を。強。と。見。す。擇。れ。う。お。き。禦。の。板。足。便。に  
行。く。我。よ。禦。を。止。め。わ。ら。う。行。け。う。強。代。板。と。禦。ふ。里。て。先。の。禦。引

道あり能の皆は身を鬼を奪ひて神の誠ひとより殊にかく

半紙作是。約孤一名吼。

押檻云大和某社云に於て名坂揚家を起す。承徳年中泉殿押  
南の佐木女林寺主と云ひ。後醍醐帝。元祐年中。岡基桃源和尙檀那  
捨頭耕雲菴ノ住僧也。伯父主と云ひ。徒守乃福荷の神と信じ  
毎日に法施をもくらふ。或時社の邊にて生の狐を発見。抱き取る  
者有り。此狐もまた靈ありて御主に従ひて其れを追蹤を防ぎま  
然の内を告る。此狐乃子孫今小寺肉身也。大寺は更をね云ふ。行  
吼噭と稱す。又狗狐もまた彼狐乞伏也。若翁と云ひ。大和成ヶ根云  
と熟視く。其形と称更也。れど此狐の面微黒乃骨髓と悉く骨筋也。之  
忽々と走り去り。是より太翁益妙を嘆く。此狂言曰。家の本事と云  
道小達めど。が如き奇特もあらず。

○玄中記云。狐五十岁。其毛变白。百岁。其目变赤。女巫与  
邪鬼同游。丈丈而为。女巫直接。千里乃还。复有  
之狐。其毛皆赤。故名也。  
草綱目云。狐形大如黄狗。鼻长而直。尾毛日以定。夜以  
出。食人寃。多眼。多足。氣慄。腥臭。其性狡。好羈。多  
食人肉。故名狐。其字。孤也。修。事。有。故。不。體。故。不。捕。  
者。多。置。石。蓋。妖。獸。多。鬼。乃。乘。多。如。之。也。其。在。中。和。之。而。  
小。亦。多。瘦。黃。黑。白。之。種。有。向。也。有。者。毛。稱。有。尾。毛。白。綠。文。有。  
者。方。佳。其。臉。毛。純。白。也。曰。狐。白。謂。其。毛。也。毛。是。裹。毛。也。下。狐。毛。  
毛。在。首。也。狐。大。水。而。殊。也。或。云。狐。是。媚。殊。也。或。云。狐。百。岁。而。變。也。  
北。斗。以。禮。也。妻。也。男。婦。也。亦。人。也。熟。也。又。其。尾。也。擊。也。而。  
火。也。故。云。狐。懸。狗。也。異。也。千。年。老。狐。多。年。古。也。所。吸。也。物。也。

○幸ね狐の湯園。唯伊豫。赤佐。阿波。忍岐の四園を參し。凡狐も參散  
百鬼も御る。人間の信者と稱す。又神陰御道の小石也。  
と傳ひ後園の神良さんどり。相傳。狐と稻荷の神はなり。そよよのまよ  
参く。ふ城乃稻荷の社。よまよは。人稻荷の社と連しく。狛とある。其が事  
ふの者も佐佑ふ異なり。拂ふ稻荷の社倉。稻鬼の神。奚狛と主の事  
樹社の中。小白狐專め。稻荷は佐佑。拂園乃。稻耳て稻荷にあり。社へ交代  
もる。土の君。彼に至る。家懷。狐さんとのお語。世の人口に餘多見  
○又武石王子稻荷社。年々十一月廿日祭。はゆる祭事。狛安殿も多き。  
○靈廟。新しく了若多く  
○凡狐喜ぶ時。声兒の啼が如く。其時も多き事と云ふ。性大狂野。引  
火を放つて。寝迫り。其家を燒く。其家を失ひて。又も家を失ひ  
居らば。又かづれ。其家を焼く。其家を失ひ。其家を失ひ。其家を失ひ。

○占出山  
紙圓

卷四

元祐十六年  
向合翰雪画

○占出より六月七日祇園會に當り。御のよろり。屋基の上に神功皇后玉宣川を難波御祭偶人を立す。

○神功皇后ハ氣長足姫尊ト号ヘ。仲哀帝の皇后ナリ。氣長宿御  
の女。毎日葛城高額媛トリ。幼ニ聰明睿智ナリ。貌容状麗ク。壽九  
年少崩。是歲十月。自皇后ニ韓と征伐。終乃之。肥前ノ國。松浦の玉  
鳴の里。乃小河の石上。糸を勾く。約。糸を取て。鉤。裳の糸を抽て  
縉。よかれて。鉤を投て。祈て曰。朕西方財。乃國。求々欲。若事。大國。乞  
そ。乃河の魚。飲鉤。よ。竿を拳て。細鱗魚。と獲。珍ふ。以上日本紀  
○或古老の語。云。伊豆に。アイワイ女郎。より。桂川の漁師。まゝ御代  
細。婦も。市小賣。小。難。ワ。イ。く。と。呼。其船。を。送。り。て。出。さ。う。が。湯。水  
干。立鳥。竹。よ。と。見。て。神功皇后。玉筋川。ノ。魚。を。ゆ。多。よ。縉。と。被。す。  
アイワイ女郎。ふ。名。在。且。ト。き。

○祇園會の支をト郊わ云。自觀た。今年歳波神紫と作は來ひの  
外ちう。曩祖日良麻呂。京中の男女代引。六月七日。十四日。夜神と神泉  
を送り。お年年く。六月七日斯のやくしつけ。是れ祇園會と云。其神事  
を置ぬ。ハ坂の御威神院より。寺と

○今祇園街靈會に風流のひ辯あり。六月七日に出でれ辯八箇。ふむ十四玉。乃  
長刀辯。三葉水辯。月辯。鶴辯。放矢辯。松辯。傘辯。二箇ふ  
かくよ鷹谷辯あり。かくよ鷹谷のほいきど辯

天神山。西教天神山。古牛山。李子山。白栗天山。破琴山。郭山。山。山。山。  
木麻山。蘆家山。蘆荪山。蟠螭山。懶骨山。雲霧山。

同廿日に出立。和洋一箇。木山九箇。石所藩。輕舟。各五箇。已  
行者山。狸山。鈴原山。八幡山。觀音山。二箇。志賀。美奈  
鷹山。引山。鶴山。鶴見。鶴見。○接引。日良慶。らゆの男。女。と。引  
度社を造る。祭風。ト。あう。七日。に。皆

次ふ見事に棒打其邊より酒を飲むと既に其鬼面をもる者を此界に  
像く。是れ送了事件より。又洋も拿絆の一處あるものと想がく。古國  
と云ふ本號を破り。あれは謀宋のものと被る。兒を智絆をす。故に  
極めて難あり。けあ姓を冠く。ち有ハ。遊行よ。像く。ち有之く。今乃  
洋トは本號ふ。像く。ものの多く。只川原の小舟も。ゆき被底林屋にて  
汎游。とくべつものう。け古國を富野行者。の間す。六月。さり育ふ。飾  
ふ。身と金をアラベ。又此幸洋ト向く。れらも。之。二月十日。今まふ。ま  
頭躍。これと安良日。富野ト向く。今まふ。身と金を。頭躍。之。が  
ろめく。つけ。身の事。と。き。し。り。く。今も。都。屋。が。の。身  
が。本。洋。の。御。よ。人。像。と。送。て。ま。よ。立。酒。被。と。送。て。川。邊。立。酒。被。と。送。て。川。邊。立。酒。被。  
ま。身。風。休。送。ふ。日良。聲。が。男。か。と。引。て。酒。被。と。送。る。身。

乱あ後ノ山岸の箇不附處九年山岸の古文書あり。紙園會  
ふ岸の事ハ近頃縫田貞宗(通称近江公)著者也。楊補紙園會細記  
四卷代著も亦多々有るが得てアリ。

○八幡大郎之圖 紙園 梶原作繪墨

○玄宗楊貴妃之圖 紙園

寶曆十二年

狩野絶殿助水良画

○楊貴妃も蜀州の同戸楊玄琰(女小字)と玉環(玄宗皇帝  
第十八の御子)寿王の妃である。玄宗皇帝之妃と壽王の官位争ひて、又眞  
宮小納戸も寢食をもく。天寶十四年安禄山が乱ふよし。帝貴妃  
と乱れ避て蜀へ逃移す。中路馬嵬(馬嵬)で驛(驛)六軍紛紛と禍(禍)ひり  
楊國忠(楊貴妃の兄)も國忠死後して貴妃を縊殺(縊殺)。

扁額軌範五之卷大尾

吉野屋 大谷仁兵衛

京都市三条通御幸町角

律達堂藏版

